

—本当の意味で、お客様と向き合う家づくりがしたかった。

野村 徹

Nomura Toru

1966年生まれ、恵庭市出身。株式会社FPホーム lia Style 事業課チーフデザイナー。専門学校で建築を学び、工務店、建設会社を経て株式会社FPホーム入社。「会話」から始まる家づくりをコンセプトに、二人という最小ユニットのプロジェクトで従来の住宅メーカーとは一線を画す住宅設計を提案する「lia Style」でデザイン・設計を担当している。趣味はサッカー、フットサル。



1. オフィス兼モデルルームとしても公開中の「lia Style 03 Model」の美しい空間。 2. お客様へ家のイメージを伝える手書きの図面も丁寧に手彩色していく。 3. “常に正直であること、ウソをつかない”。これが野村の信条である。 4.「lia Style」の最新作はメインの窓が北向きにあり、向かいの公園の並木が絵画のように眺められる。 5. オフィスにて。相方の治部(左)に比べてどちらかというと野村は寡黙なタイプだが、家づくりへの熱い想いは同じ。 6.「lia Style」が手がけてきた住宅の模型。すべて野村の手作りだ。

ザ・プロフェッショナル

The professional

仕事の現場

「住宅設計者にとって一番大切なことは、とにかくお客様とじっくり会話することじゃないかなと思うんです。家族のライフスタイル、好きなこと、休日はどんな風に過ごしたいか。何気ない会話の中からポツポツと浮かび上がってきた本音やヒントを踏まえて設計させていってください。表層的な『デザイン住宅』ではなく、もっと深いところにあるもの。生活提案を含めた家づくりを、お客様と一緒に進めていきたいんです」

注文住宅「FPの家」で知られる株式会社FPホーム。その中に、わずかに二人という最小ユニットで家づくりを担うプロジェクト「lia Style (リアスタイル)」がある。そのデザインと設計を手がけるのが、野村徹だ。相方でチーフプロデューサーの治部泰久と二人、同じ理念を共有しながらこれまで8棟を送り出してきた。それらは一棟たりとも同じ姿はない。住む人が違えば、生活も好きな世界も違い、住まいの形が異なるのは当たり前。しかし、住宅業界ではパターン化された規格の中で選択していくという名ばかりのオーダーメイドも多く、似たような家が溢れているのも実情だ。

「大手住宅メーカーでは、営業マンがお客様の要望を吸い上げ、それを元に設計士が図面を描くという流れが主流。着工が始まってしまえば、もう手を離れて次の物件のデザインに追われる...ということも多いんです」

パターン化する間取りや住設、設計者は設計のみ担当という考え方がある住宅業界に身を置きながらも、そのあり方に違和感を感じ、ヒントを求めて治部と訪ねたのが千葉県と北見市、二つの工務店。両工務店が手がけた家の住人は、はたで見ても感じられるほど社長に信頼を寄せ、その家の特徴を細かく説明できるほど熟知していた。「大切なのは建物の姿かたちではない。お客さんとの信頼関係だよ」。両店の社長が教えてくれた家づくりの本質を、野村は今も心に刻む。

「それが基礎となり、今の僕らがあるようなもの。お客様とはとことん話し合い、着工後も二人とも毎日のように現場に通っています。またお客様にも、自分達の家を完成させるチームの一員として参加してもらいたいから、現場へ何度も来てもらい、床材のオイル塗りなど仕上げ工程と一緒にやってもらっています」

さながら、「lia Style」のもう一つの特徴は、小さなディテールにリアリティを込めること。窓、キッチン、家具、空調、板金...と、野村達が惚れ込んだ各分野のスペシャリストが参加している。彼らは二人の家づくりへの熱い想いに共感した、同志である。デザインの美しさは当然とし、使い勝手の良さ、住み心地の良さを追求した「lia Style」の住宅の中には、彼らの技術と知恵と愛情が結集されている。それがひしひしと伝わってくるからこそ、自分の家づくりを託したいと希望する人が途切れることなくやってくるのかもしれない。